

1. 白馬村景観計画策定委員会における白馬村景観計画素案検討の流れ

白馬村景観計画策定委員会は、白馬村が景観行政団体として策定が必要な「計画素案」を作成することが主な役割となります。正式な景観計画は景観行政団体となった後に策定することとなりますが、基本的には、この「計画素案」を住民や審議会、議会や長野県などからの意見を盛り込み調整したものが、景観計画として位置づけられます。

「計画素案」の検討は、長野県との調整を図りつつ、以下のフローに基づき進めていきます。

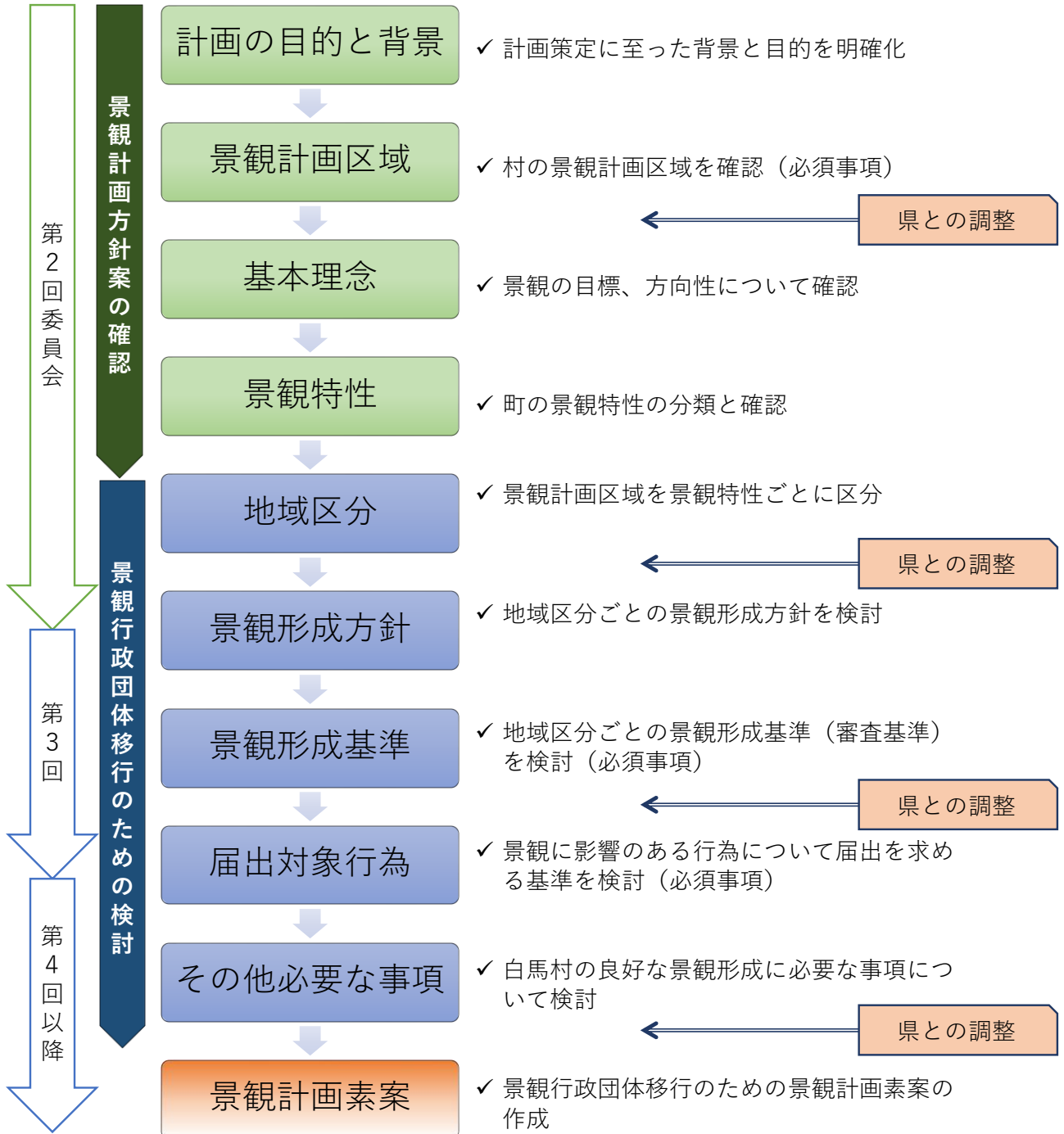


図 景観計画策定委員会での検討の進め方

2. 景観計画方針案の確認

2-1 計画の目的と背景

白馬村は美しい自然環境に恵まれています。白馬三山をはじめとする北アルプスの山々、そこから流れる清冽な水が、里山や人々の生活を豊かに育んできました。松本市と糸魚川市を結ぶ千国街道沿いには集落が築かれ、姫川に注ぐ松川や平川などの扇状地には豊富な水を活かした水田がひろがり、地域に根差した文化が息づいています。

また、登山・スキー文化が流入した大正時代以降は、日本を代表する山岳およびスノーリゾートとして、大きな発展を遂げます。1998年に長野冬季オリンピックの会場に選定されたことで、世界に注目されるリゾートエリアともなり、現在にいたるまで国内外から来訪者を多く迎えています。他方、この期にできた通称・オリンピック道路は長野市と白馬村とを1時間で結び、村の流通経済を変化させたと同時に、景観にも大きな変化をもたらしました。

近年における景観に対する白馬村独自の取り組みは、平成元年「1998 冬季五輪招致事業」を皮切りに、同年の「松本・日本アルプス国際観光モデル地区推進事業」、平成2年、国際的山岳都市の創造をテーマにした「アルプスの街・白馬の景観—景観形成へのアプローチ—景観形成基本計画」がまとめられています。

平成10年の長野冬季オリンピック以降は、平成11年12月に「白馬村開発基本条例」の見直しを行い、環境の保全および景観の形成に関する施策の基本事項を定め、同年9月には、建物外装色彩指針として「白馬村まちづくり環境色彩計画」をまとめています。

平成16年の景観法施行によって長野県が景観行政団体となってからは、翌17年に長野県景観条例が改正され、白馬村の大半は信州の景観の骨格や顔となる地域であることから、特に重点的に景観の育成を図る区域として「国道147号・148号沿道景観育成重点地域」に指定されています。

また、平成27年度に国が策定した「明日の日本を支える観光ビジョン」では、主要な観光地を有する自治体には、景観行政団体に移行してより高い地域性をもった景観を育てることが求められています。

このような「自然環境」「生活文化」「観光産業」「交通」を背景とするなか、この美しい景観が白馬村の財産であることを村民全員が認識し、次の世代へ伝え、守り、育てていくために、村民・事業者・行政の協働により、地域に合ったきめ細かい景観づくりを進めるため、白馬村景観計画を策定するものです。

2-2 景観計画区域（景観法第8条第2項第1号）

白馬連峰と西側前山の織りなす山岳、景観田園と緑の背景に囲まれた集落、登山・スキーの観光やリゾート開発により形成された景観、そこに人々が暮らし、生活や文化・歴史を育んできました。

それらが相まって白馬村の景観を作り出していることから、白馬村全域を景観法第8条第2項第1号に定める景観区域とし、さらに地域の特性に細やかに応じられるよう、景観計画区域の地域区分と景観形成方針を設定します。



2-3 基本理念

白馬村では、村づくりにおける心の拠りどころとして、白馬村村民憲章を掲げています。

白馬村村民憲章

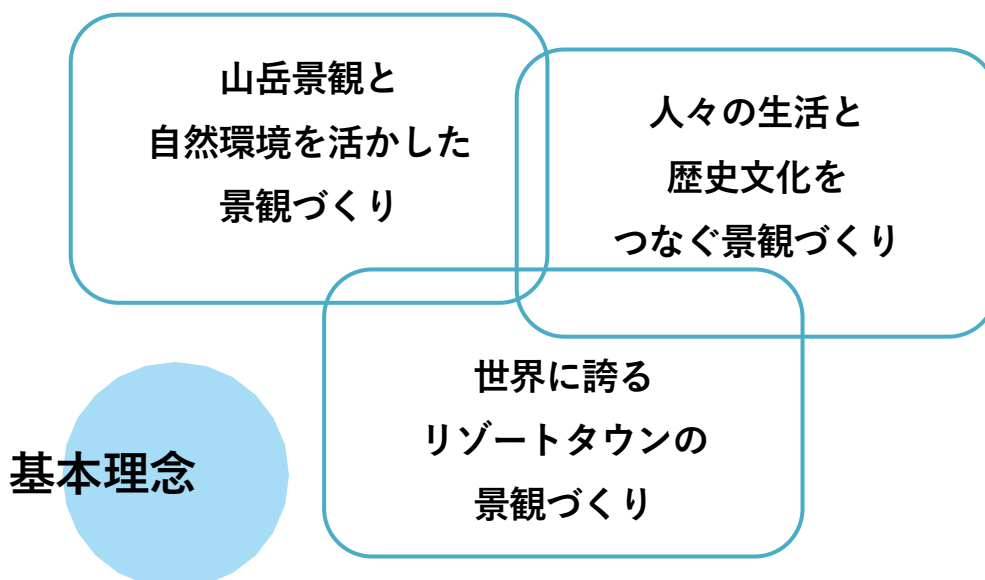
- ・自然に学び風雪に耐えて 力強く生きましょう
- ・先祖の遺産を受け継ぎ 地域に根ざした文化を築きましょう
- ・あたたかい心を育て 明日をつくる喜びをわかちましょう
- ・美しい山河を守り 住みよい村をつくりましょう
- ・白馬の土と人を愛し 来訪者をあたたかく迎えましょう

以上に加えて3つの「気」

…すなわち「気品」「気配」「気遣い」を、よりよい景観を育む心もちとして大切にします。

- ・豊かな自然に対する畏敬の念と、それを誇りに思う気持ちにあふれた「気品」
- ・自然や四季、景観の豊かさを敏感に感じとって尊重する「気配」
- ・日常における村民同志のふれあいや、国内外の来訪者をあたたかく迎える「気遣い」

これらから導かれる以下の3つの基本理念で、白馬村を美しい村に育てます。



【山岳景観と自然環境を活かした景観づくり】

■山岳眺望（視点場・景観軸）

白馬盆地を取り囲む山々は、村の自然環境を代表する存在であると同時に、登山などのアウトドアスポーツの舞台にもなります。同時に山々は景観の要素でもあり、ひろがりのある景色のなかでは背景として、また道路や川から見通す際にはランドマーク*にもなります。

このように、ある時は背景を成し、またある時には景観を特徴づける主役にもなる山岳のあり様は、白馬村の景観を考えるうえで欠くことのできない存在であり、視点場や景観軸を考える際のポイントです。

■自然エネルギー活用と景観の共生

世界的な気候変動も背景に、自然と共生する開発のあり方を考えることや、エネルギー活用ではCo2の発生を抑制し、美しい自然を次代につなぐことは、世界に共通するテーマになっています。白馬村は2019年12月4日に気候非常事態を宣言し、再生可能エネルギーへのシフトなどを積極的に進めています。小水力発電、EVシェアリング、木質バイオマスなどの推進と、他方で、自然と共生するという本来の目的に合わせ、美しい環境と景観を育てる取り組みも必要です。

■自然景観（水・緑・雪）

水や緑、雪は、景観に動きと四季の変化を生みだします。白馬村では、3000m級の白馬連峰から渓谷へと流れだした雪解け水は、楠川、松川、平川、犬川、谷地川などの河川から姫川に合流します。雄大な大雪渓および渓谷、姫川支流の各河川越しに白馬連峰を望むことができ、豊富な水量を湛えた姫川沿いには田園風景がひろがります。清らかさと動きのなかにさまざまな表情を見せる水は、村の景観の主役のひとつです。

「緑」も四季折々の豊かな表情を見せてくれます。白馬村の遅い春、花々が一斉に咲き木々が芽吹きます。別荘地を囲む林は夏の陽射しを遮り、木漏れ日が豊かな表情をつくり出します。秋には、標高2000m地帯にひろがるダケカンバから、1500m地帯に生えるブナなど、高いところから徐々に黄色や赤に色づきます。

冬には「雪」が白馬村の生活や景観の主役となります。スノーリゾートの舞台となる雪のフィールドや、雪に覆われた北アルプスは、村を代表する存在です。12月から3月にかけては市街地や集落も白一色の雪に覆われることから、雪と調和し雪に映える景観づくりも大切です。

これら様々な自然景観要素を、うまく組み合わせ活かし景観づくりに取り組みます。

【人々の生活と歴史文化をつなぐ景観づくり】

■生活文化の景観（伝統的集落・耕作地・植林）

白馬村では、千国街道や山間の脇街道沿いにいくつもの集落が設けられ、人々の暮らしを育んできました。産業の変革や交通の発達にともない、そこでの生活様相は大きく変わりましたが、大きな萱葺屋根の民家、集落に点在する神社と林、棚田などには、今なお歴史文化を感じさせる景観要素が残っています。

このような、形に残る景観要素だけではなく、集落の人同士のつながりもまた、生活文化を語るうえで大切な存在です。集落にいたる細い山道の整備や手入れ、雪下ろしなど共同作業への参加など、一見すると不便に思える生活のなかにも、集落の人々がともに暮らす文化が息づいています。こうしたことは“形のない景観要素”として特筆すべきであり、神城断層地震の際に大きな被害を受けた堀之内の集落において、一人の犠牲者もでなかったことは、普段から人々のつながりの賜物です。震災後、堀之内地区が美しい景観へと生まれ変わっているのも、こうしたつながりによるのです。

また、各地区の寺の境内にそびえる樹齢400年を超える杉木立や枝垂れ桜もまた、村の歴史文化を雄弁に語る存在であり、街道沿いの石仏群と合わせて、文化的景観要素です。

水が豊富な白馬村では、広く稲作が営まれ、よく手入れされた緑の風景が現在もひろがっています。

こうした白馬村の美しい風景をこれからも守り育てていくため、人々の生活と歴史文化をつなぐ景観づくりに取り組みます。

【世界に誇るリゾートタウンの景観づくり】

■建物・広告物

古くからある集落の伝統的な建物、観光ブーム初期に建てられた大型の民宿やホテル、リゾートブーム頃の別荘やペンション、駅周辺に点在する商業施設やオフィス、近年建替えられた住宅、海外からの移住者による新感覚の住宅や別荘、新たな観光ニーズで建てられたアウトドアショップやグローバル企業の建物をはじめとして、白馬村にはさまざまな時代の特徴をもつ多様なスタイルの建物が共存しています。

こうした、個人の所有物となる建物や広告物は、人それぞれの趣味趣向や自由が尊重されます。ただし一方でそれらを“街並み”としてとらえてみれば、個々の建物がお互いに調和を保ち、自然や風景と一体になった景観を目指すことが、白馬村のイメージを国内外にアピールすることにつながると考えられます。

■オープンスペース（道、広場、建物周辺）

建物と同等あるいはそれ以上に景観に影響を与えるのが、塀、生垣、舗装、植栽や隣地との間隔など、建物と一体になった周辺の佇まいです。

特に白馬村では、冬の生活を営むための雪かき、雪寄せ場といったオープンスペースのデザインも重視されます。生活と景観の両面を考えつつ、美しく維持管理できる建物周辺のしつらえが、景観のあり方を大きく左右します。

また、道や公共施設、広場、駅のロータリーおよびバスターミナルなど、多くの人々が集まるスペースも大切に、舗装、街路樹、歩道、水路、街路灯などのデザインも、考え合わせる必要があります。

こうしたデザインには、白馬村のみならず大町や小谷も含めた広域のリゾートエリアが一丸となっ

て取り組み、HakubaValley を国内外に印象づけることが、これからの観光戦略を考えるうえでも重要です。

特に白馬駅前の道路など、多くの人々がメインストリートとして意識を共有する軸景観のあり方は、村の景観を先導する要素としても、大切な位置づけにあります。

これらのことから、白馬村をアピールすることができる、世界に誇るリゾートタウンに向けた景観づくりを進めます。

2-4 景観特性

白馬村の景観は、「自然環境」、「生活文化・歴史」、「観光産業」、「交通（道）」の特徴的な4つの景観要素で捉えることができます。これら景観要素が絡み合い、「景観の境界」、「面的な広がりを感じる景観」、「まとまりや集まりのある景観」、「奥行やつながりの感じる景観」、「方向や目印となる景観」により景観的な空間を構成しています。【図-1 景観の基本構造図 7ページ】

景観要素と景観の空間構成を踏まえ、自然公園法などの法的規制、土地利用や建物状況等の現況を考慮したうえで【図-2 土地利用や法的規則から見る景観特性 8ページ】、景観計画区域を5つの地域と3つの景観軸に区分することができます。【表-1 景観計画区域のゾーニングの考え方と地域区分の検討 9ページ】【図-3 景観計画区域の地域区分図 10ページ】